

1880-1910年代のイギリスにおける日本製室内着 ——リバティ商会の通信販売カタログを手がかりとして

京都服飾文化研究財団キュレーター 周防珠実

JAPANESE-MADE GOWNS IN BRITISH LIBERTY'S CATALOGS, 1880s–1910s

Tamami SUOH, Curator, the Kyoto Costume Institute

If you see the changes in Japanese-made gowns published in *Liberty's Catalogs: Fashion, Design, Furnishings, 1881–1949*, microfiches owned by the Kyoto Costume Institute, Japanese-made quilted dressing gowns can be found in the mail order catalogs even from the first issue in 1881. They seemed to reach their peak in the 1890s. In those days these gowns were considered as cheap substitutes for the gowns produced in western countries, but the Japanese-made kimonos produced for European and U.S. markets appeared for the first time in the aforementioned catalog in 1892 were more expensive than the quilted ones. At the beginning of the 20th century, the fashion trend of lounge wears shifted to kimonos, and kimonos became increasingly expensive and regarded as important products in the catalog. This movement was parallel with the Japonism movement, which was growing in the fashion field in those days, and thus clarifies that “Japan” was considered a fashionable value added or brand item.

はじめに

19世紀後期から20世紀前期、ファッションにおける特徴の一つは、服種が多岐に細分化していたことである。衣服は時間帯や場所、状況に応じてその装いが厳格な作法で定められ、室内における衣服としての室内着もまた、時間帯や用途に応じて多様化し、需要は拡大していた。

日本が1853年に鎖国を解き、下田、函館に続いて横浜や神戸などの4港の開港によって近代的な商取引としての輸出入を開始したのは、それに少し先立つ時期である。輸出の初期段階には絹関係では生糸が主要な輸出品であったが、1873年のウイーン万博後、付加価値のある絹製品として日本から室内着が輸出され始めた。

こうした欧米の室内着需要拡大に向けて、19世紀後期から1910年代に海外へ輸出された日本製室内着の例を、KCIは7点所蔵しており、また海外でも確認されている(註1)。それら日本製室内着はファッションの流れに準じて、いわゆる西欧衣服の形状をもつドレスिंग・ガウン類と、Kimono(キモノ)、即ち日本の衣服の形状に近似するか、あるいは何ら

かの点が日本的とされて西欧で着用された室内着に大別できる。また着物がそのまま室内着として着用された例(註2)もあるが、本稿では取り扱わない。

日本製ドレッシング・ガウンの最も初期の例は1870年代の椎野正兵衛商店製絹羽二重のキルティングのドレッシング・ガウンがこれに該当し、当時の流行ドレスの形状に近い広がったスカート、長袖、前明きのガウンである。主に19世紀末までの流行である。椎野正兵衛のドレッシング・ガウンについては拙稿の「明治初期の輸出室内着——椎野正兵衛店を中心として」(註3)において検証した。キモノは19世紀末からファッションに広がるジャポニズムの追い風を受けて、1900年代以降に輸出が拡大し、ドレッシング・ガウンに代わる室内着として着装された。フランスにおいての先行研究はファビエンヌ・ファリュエル「ベルエポック期のキモノマニア」(註4)や、フランスにおいて「キモノ」という用語の受容については深井晃子「"キモノ・サダヤッコ"」(註5)がある。

日本製室内着は、イギリスが主な輸出先であった(註6)。イギリスのリバティ商会は1875年の設立当初から日本製品を含む広く東洋の品々を販売していた。1881年に刊行を開始する通信販売用のカタログには日本製室内着が見られる。本稿では、1881年から1949年までに刊行されたリバティ商会のカタログ『Liberty's Catalogues: Fashion, Design, Furnishings, 1881-1949』のMindata社から発行されたマイクロフィッシュ版を手がかりとして、1880年代から1910年代にかけてイギリスにおける日本製室内着の普及の状況の一端を探りたい。

日本製室内着の輸出拡大の背景

日本製室内着はとりわけ先述した1880年代から1920年代にイギリスを含め欧米で受け入れられたが、その背景には次のような要因が考えられる。

まず、西欧における室内着の需要拡大があった。西欧社会が近代化を遂げていく19世紀、産業革命の恩恵を受けた新興富裕階級の台頭は新たなファッション・リーダーの登場を生み、またかつてはごく限られた階級にしか許されなかったおしゃれを広い層の人々が享受できるようになる。こうした状況のもと、先述したように衣服の細分化、着分けが広がり、室内着においてもさまざまな状況に応じて、「朝用ガウン」、「ティー・ガウン」(註7)、「ドレッシング・ガウン」などと着分けられるようになり、その需要は著しく拡大していく。

こうした流れを読み取り、日本政府は絹、あるいは絹製品の輸出を当時最重要の政策とした。輸出開始の時点では生糸などの原材料が中心だった。しかし、輸出拡大のためには原材料だけでなく、加工品として付加価値をもつ絹製品の輸出が試みられていく。先述した椎野らの西欧における市場調査の実施後、ハンカチや室内着の輸出が奨励されるが、室内着の総量や額はハンカチには遥かに及ばなかった。そのために輸出統計記録には室内着は「その他

の絹製品」として一括りとなっている。1885（明治18）年によく室内着が輸出に関する日本の文献に登場し（註8）、当時輸出された男女用「西洋寝衣」としてキルティングのドレッシング・ガウンの製造方法が解説されている。つまり、キルティングのドレッシング・ガウンはまだ貿易統計上には現れないが、1880年代に輸出品目として認識されるようになったことを指している。

やがて、1900（明治33）年に日本の輸出統計に室内着の項目が初めて記されるようになる（註9）。この国別輸出統計書を見ると、イギリスとアメリカが「寝衣」（英語表記は「silk gown」）の主な輸出先であり、約10年間の輸出先の首位はイギリスであった。他の項目に比べて依然として僅かではあるが、この頃から室内着の輸出量がさらに飛躍したことを示唆している。当時、ドレッシング・ガウンと共に室内着としてのキモノが輸出されているのだが、統計からはその内訳は判別がつかない。また日本製室内着のイギリスにおける商況に関する日本の文献は、現在の調査においては見られない。キモノと表記されて西欧への輸出状況が記された日本の文献は、農商務省が1904（明治37）年に発行した『輸出重要品要覧』の中の1901（明治34）年のシカゴ領事館からの報告（註10）が初期のものと思われる。重要な輸出品の商況を報告しているこの文献において、当時シカゴにおいてキモノと称した衣服が流行しているとあり、この頃までにキモノが西欧向けに輸出され始めたと考えられる。この報告によると、日本製の絹織物の販路拡大につなげるため、意匠を凝らしたキモノを作ることを奨励している。このような現地での商況報告や改善案が度々提案され、日本製品の輸出拡大が試みられていた。

さらに、ジャポニズムが広く一般の人々の生活の中にも広がっていたこともあげられる。ジャポニズムの流行は多岐にわたり、多大なうねりとなってさまざまなジャンルを巻き込んでいくことについて、とりわけファッションに与えた影響がどのような歴史的展開を見せたかについての説明は、KCIが1994年に京都国立近代美術館で開催した「モードのジャポニズム」展（註11）で試みた。

こうした流れの中で日本製品を販売する店も西欧各地に開店し、ロンドンではファーマー&ロジャース商会が1862年のロンドン万博後の売り立てから日本製品を購入し、新たに設立した東洋部門で販売した。この購買を担当したアーサー・ラセンビィ・リバティ Arthur Lasenby Liberty（1843-1917）は1875年に独立し、リバティ商会を設立する。同商会は、先述のとおり日本製品のイギリスにおける重要な販売店となっていった。

リバティ商会のキルティングのドレッシング・ガウン

リバティ商会は、1881年から通信販売用のカタログを刊行している。このようなカタロ

グは、19世紀後半以降、西欧で次々と設立された百貨店などが中心に、地方や海外の顧客に向けて刊行したものである。これらに記載されている商品は当時の社会の需要動向の一端を知ることができる。リバティ商会のカタログには発行年が記されているだけで号数はない。「刺繍」、「布地」、「家具」、「陶磁器」、「カーペット」、「衣服」などそれぞれの分野別のカタログと共に、多岐にわたる商品が記載されたカタログとして「クリスマス」や「東洋芸術品」などのカタログが発行されていた。日本製の室内着が見られるのは主に「クリスマス」と「刺繍」のカタログにおいてである。1884年に衣装部門が設立されたが、そのカタログには、西欧衣服の形状の室内着のみで日本製室内着は掲載されていない。

リバティ商会のカタログにおいて、日本製のキルティングのドレス・ガウンが取り扱われていたのは、1881年から1920年までである。リバティ商会のカタログ第1号である1881年の東洋芸術品のカタログ（註12）に、写真やイラストはないが、絹地にキルティングとさまざまなモチーフの刺繍入りの日本製ドレス・ガウンが初めて記載される。このカタログでは、衣服としてこの日本製ドレス・ガウンと、インド製ドレス・ガウンのみが掲載されている。

1892年のクリスマス・カタログ（註13）から日本製のドレス・ガウンはイラスト入りで紹介されようになり、1ページにわたって他の商品よりも取り扱いが大きくなった。女性用及び男性用のドレス・ガウンは刺繍のないものから刺繍入りのものまで数種あり、男性用スモーキング・ジャケットを加えて合計6種であった。これらのドレス・ガウン類は「リバティ商会のために日本で特別に作られた」とある。リバティは、妻エマと共に1889年から90年まで日本を訪問し、90年に横浜に支店を出している（註14）。これによって日本製品の取り扱いがさらに強化され、日本の製造元に需要に応じた指示を直接出していた。ドレス・ガウンの細部の構造、例えば袖などの形状は、ドレスの流行に準じて変更されるようになった。安定した供給と品質の確保と共に、92年のカタログから大きく取り扱われるようになったのは、イギリスにおける生活レベルに広がるジャポニズムの影響も見逃せないだろう。

これ以降、カタログにおいてキルティングのドレス・ガウン類の取扱いはさらに大きくなっていく。96年のクリスマス・カタログでは、2ページにわたってイラストと共にいかにこの日本製のドレス・ガウン類が美しく、快適で、かつ比較的安価であるかという解説を長々とおこなっている。この頃からリバティ商会がキルティングのドレス・ガウン類の販売を最も強化していたことを示している。また、種類も増加し、99年のクリスマス・カタログでは男女用共にドレス・ガウンやドレス・ジャケットは刺繍の有無に応じて、あるいは刺繍の程度に応じて、12種にまで拡大している。しかし、

1890年代をピークとして、1900年のカタログには8種へと減少し、その後16年までは7、8種、17年には3種となり、19年からは文字のみとなる。カタログにおいて20年までドレス・ガウンが記載されているため、その後も需要はあったことがうかがえるが、1900年頃からドレス・ガウン類は減少の途をたどっていく。

リバティ商会のキモノ

室内着需要として、キルティングのドレス・ガウンにとって代わるのは、キモノである。

室内着としてのキモノの流行は、イギリスとアメリカで刊行された『The Delineator』誌1890年11月号からうかがえる(註15)。型紙販売を目的として発行された同誌では、室内着としてのキモノを紹介し、その型紙を販売している。それによると、「ギルバートとサリバンのオペラ『ミカド』の上演によってよりよく知られるようになった日本の衣服やキモノを正確に再生できる型紙」と説明されている。この記事は、「キモノ」が室内着としての意味をもつ用語としてイギリスで使用された早い例と思われる。

リバティ商会の設立間もない頃に、画家ホイッスラーが女優テレン・エリーのために同商会で日本の着物を購入して贈っていることから、同商会は設立初期から日本の着物を販売していた。1885年の刺繍製品カタログに日本の着物が初見されるが(註16)、室内着という用途に限らず多様な使い方をされた日本の着物については、本稿では取り扱わない。

室内着としてのキモノがリバティ商会のカタログに登場するのは、1892年のクリスマス・カタログであった。文字のみでページの片隅に、男女用の朝用ガウン向きの室内着として「Japanese Printed Cotton Crepe Gowns」と記載されている。未だ「キモノ」とは表記されていないが、後のカタログには同様のものがキモノの項目に加えられるようになるため、室内着としてのキモノを紹介したものとして、このカタログは初めての例と考えられる。なお、日本製ドレス・ガウンはこれとは別のページに記載されている。

室内着を指す「キモノ」という用語がカタログに初見されるのは、1896年である。「Japanese Kimono (or Native Dress)」という品名で、絹サテンや絹クレープなどにさまざまなモチーフが刺繍され、当時室内着としては最もフォーマルな服種として人気があったティー・ガウンとしての着用を推奨している。と同時にこれは仮装舞踏会の衣服用としても奨められている。以後、毎年、キモノはクリスマス・カタログで取り扱われるようになる。

1900年のカタログには、リバティ商会が自社のリバティ・シルクで製作したキモノが加わり、1902年からは日本で製作されたキモノなのかあるいはリバティ商会によるものなのかは明記されていないが、フランネル製などの安価なものが加わっていく。キモノはこの頃

から日本製、リバティ製、あるいは生産地不明のものまでが掲載され、価格や素材などに多様な広がりを見せていく。

当時のイギリスにおけるキモノの流行は、1902年10月4日号の『The Queen: The Lady's Newspaper』紙の記事に、キモノ（表記はKimona）はそれまでの流行であったドレスिंग・ジャケットや従来のティー・ガウンに代わるものとして効果的で優雅に役に立つと書かれていることからもうかがえる（註17）。

1905年のクリスマス・カタログにおいてキモノの種類は最大になり、それまでは中国の衣服と同ページに混載されていたキモノは、ページ全面にわたって掲載されるようになる。そこには裾の広がった形状、即ち、海外向けに生産された日本製キモノの写真が記載されている。また、1910年のクリスマス・カタログには、帯の代わりとして両端にフリンジ付きのサッシュ・ベルトを結ぶキモノの写真が掲載されている。これらのキモノは西欧市場向けに日本で製作したキモノであり、こうした例はKCIやメトロポリタン美術館など欧米の美術館に現存している。KCIの例は、1904-08年頃の飯田高島屋製で桜と孔雀が大胆に刺繍され、袖口にピンクの組紐と房飾りが付き、三角形のマチ布が両脇にはめ込まれ、着物とは異なる裾広がりを持つ。この例のように日本で西欧市場向けに着物をアレンジして製作したキモノは、三越呉服店が1904年に刊行した貿易用カタログ（註18）にも多く見られる。この貿易用カタログには、上述したようなマチ布がはめ込まれたキモノや、帯の代わりとして両端にフリンジが付いた共布をサッシュ・ベルトとして結ぶキモノが、布地の種類や刺繍の分量によって多様な展開を見せている。三越呉服店や飯田高島屋といった日本の大手百貨店は、19世紀末から西欧市場を意識し、積極的に貿易事業を展開し、キモノは重要な商品であった。いつ頃からリバティ商会のカタログにこのような日本製キモノが記載されたのかを検証するのは、カタログに全てのキモノの写真が掲載されていないため判断し難いが、上述したように1905年から写真入りで大きく掲載され始めることから、この頃、西欧市場向けにアレンジされたキモノは、多様化したキモノの中でも主要な位置付けとして取り扱われていたと考えられる。

20世紀初期に、アメリカで着用されたキモノには安価な人造絹糸製のドイツ製キモノがあり、アメリカで猛盛を振るっていたことが伝えられている（註19）。それを裏付けるように『シアーズ・ローバック』や『モントゴメリー・ワード』などのアメリカの通信販売用カタログには日本の着物の形状には程遠い安価なアメリカ製やドイツ製のキモノが多く見られる。フランスでもキモノ人気の高まりが同じ頃に起こっていた。リバティ商会のカタログにおけるキモノは、日本の着物に近似するキモノが中心であった。リバティ商会のカタログにおいて、キモノは1934年まで引き続き掲載されていた。

まとめとして

以上、西欧市場に向けた日本製の衣類がイギリスにおいて室内着需要の広がりと呼応していく過程を見た。リバティ商会のカタログに、日本製室内着として初期から掲載されたのはキルティングのドレス・ガウンであり、その需要の最盛期を1890年代とみなすことができる。同じ頃、リバティ商会が製作・販売していた西欧衣服形式の室内着に比べて、日本製ドレス・ガウンは価格が4分の1から3分の1と安価であり（註20）、西欧製室内着の入手しやすい代用品として普及していったと言える。

これに続いて日本製室内着としてのキモノがリバティ商会のカタログに初登場するのは1892年である。この時期、即ち1890年代には同商会は、日本製室内着としてはドレス・ガウンと共にキモノを販売していた。しかし、日本製キモノは、同時期のリバティ商会の衣装部門が製作した西欧衣服の形状をもつ室内着とほぼ同額であり、日本製ドレス・ガウンに比べて高額商品として扱われていたのである（註21）。さらに、20世紀初頭に室内着の流行はキモノへと移行する。この時さらに、日本の百貨店製の西欧市場向けキモノが、リバティ商会のカタログにおける室内着のなかで高価な部類に属し、重要な商品となっていく。この頃のカタログには、日本製だけでなく、西欧で作られた多様なキモノも登場し、価格帯もその種類も大きく広がっている。このことが示すのは、当初の後進国からの安価な品としての日本製ドレス・ガウンの需要という位置付けから、「日本製」の商品はいわばファッション商品として扱われるようになったのである。これについては、当時高まりつつあったファッションにおけるジャポニスム熱が室内着にも及んでいたことに他ならないと言えよう。この時、西欧のジャポニスムという風に乗って、「日本」は付加価値として作用しており、いわば「日本」はある種のブランドとなっていた。

リバティ商会のカタログを手がかりとして、イギリスにおける日本製室内着の広がりをみる時、1880年から1920年という年代が浮かび上がってきたが、これはイギリスにおいてファッションにおけるジャポニスムの広がりがこの時期であったことを示すものであり、また、1890年代からの「キモノ」という用語の受容の一端も明らかになった。

〈註〉

1. KCIが把握しているのは、イギリスのロンドン博物館、ナショナル・トラスト・キラートン、アメリカのメトロポリタン美術館、ケント大学附属美術館、ボストン美術館、フランスのパリ国立衣装テキスタイル美術館、パリ市立衣装美術館（パレ・ガリエラ）などの所蔵品である。
2. 深井晃子「モードのジャポニスム」『モードのジャポニスム展』図録 京都服飾文化研究財団 1994年 19頁
3. 周防珠実「明治初期の輸出室内着——椎野正兵衛店を中心として」『ドレスタディ』第41号 京都服飾文化研究財

団 2002年 13-22頁

4. Fabienne Falluel, "Kimnomania à la Belle Epoque", *Japonisme et Mode*, Palais Galliera, 1996, pp.137-143.
5. 深井晃子「"キモノ・サダヤッコ"」『川上音二郎と1900年パリ万国博覧会』展図録 福岡市博物館 2000年 132-135頁
6. 『外国貿易概覧』大蔵省主税局 1890(明治23)年 43頁。輸出当初は主にロンドン向けの比較的高級品として輸出され、そして1900年頃からは大量発注によるアメリカ向けの安価品を中心に輸出されていたといわれている(『横浜輸出絹業史』横浜輸出絹業史刊行会編 1958年 620頁)。
7. ティー・ガウンの先行研究は、深井晃子「ティーガウン」(『ドレスタディ』第3号 京都服飾文化研究財団 1983年 8-11頁)において検証されている。
8. 『貿易備考』大蔵省記録局 1885(明治18)年 194頁
9. 『国別輸出入品価額十ヵ年対照表』大蔵省関税局 1909(明治42)年 1-48頁
10. 『輸出重要品要覧』農商務省 1904(明治37)年 136-137頁
11. 『モードのジャポニスム展』図録 京都服飾文化研究財団 1994年
12. *Eastern Art Manufactures and Decorative Objects from Persia, India, China, and Japan*, Liberty & Co.'s East Indian Art Warehouse, 1881, p.121. このカタログはリバティ商会が最初に刊行したカタログである。日本製ドレッシング・ガウンは5から10ギニー、同頁のインド製ドレッシング・ガウンは63シリング(つまり約3ギニー)で販売され、日本製ドレッシング・ガウンは比較的高価であった。
13. "Liberty" *Yule-Tide Gifts*, Liberty & Co., 1832. このカタログは主に家具類を扱う部門「Chesham House」と布地を扱う部門「East India House」による44ページのカタログで、220点のイラストによって商品が紹介されている。
14. 『JAPANと英吉利西 日英美術の交流1850-1930』展図録 世田谷美術館 1992年 133頁
15. *The Delineator*, November 1890, pp.319, 324-326, 340-341. 1873年創刊の女性誌。アメリカの衣服型紙販売店であるバタリック社が同行しているが、1881年2月号によるとニューヨークとロンドンに拠点を置き、出版をおこなっていた。
16. *Eastern Art and Other Embroideries*, Liberty & Co., 1885, pp.8-9, 12-13. 他にも1886年、92年、94年の同カタログに記載されている。
17. "Japanese Modes Adapted to Western Women's Dress," *The Queen: The Lady's Newspaper*, October 4, 1902.
18. *Catalogue of Artistic Creations by the Mitsukoshi Gofukuten*, the Mitsukoshi Gofukuten, Ltd., n.d., c.1904.
19. 松倉順一「欧米に於いて如何に日本品が模造されつつあるか」『貿易製産品共進会講演集』川嶋右次編 神戸市役所内貿易製産品共進会 1911(明治44)年 138頁。また、1904年8月号の『ハーパス・バザー』でもアメリカ製の安価なキモノの記述がある。
20. *Season for 1894-5 'Liberty' Costumes, Mantles, and Mullinery for Ladies & Children*, Liberty & Co., 1894, pp.5-15.
21. 前掲書